



## アメリカ・カナダ園芸療法視察記

～「自然と癒し」体験から～

腰原 菊恵\* 山根 寛\*

### 旅のきっかけ

ジメジメとした梅雨のある日、職場に友人の菅園芸療法士がニコニコしながら訪ねてきた。アメリカとカナダの園芸療法を、菅がコーディネーターをし、山根が作業療法の視点から医療・保健・福祉との連携を説明する研修ツアーが決まったことを、嬉しそうに話し始めた。頷きながらきいている私（腰原）に、「ナイアガラの滝を一緒に見に行こう。きっと楽しいよ」と言う。仕事があるしどうしようか迷っていたが、本格的に暑くなり始めた7月の終わり、ツアーに先立ち団長の山根が急性の椎間板ヘルニアで動けなくなってしまった。本人はこれ以上仕事を背負うと腰が砕けるといふ身体言語だ、だけどツアーはどうしても行きたいと言うため、付き添い役と経費削減のための添乗員補佐役として、今回の研修ツアーに参加することになった。もちろん行くからにはアメリカやカナダの大自然に触れて自分自身を癒してこよう、アメリカやカナダの様々な分野での園芸療法を通じて見える医療やリハビリテーションを色々見てこよう、今まで見たことのない日本以外の作業療法に触れ、日本の作業療法をまた違った方向から考えられるような新しい発見があるかもしれない、という様々な期待や思いもあった。

### 旅のはじまりと新たな出逢い

2000年9月8日（金）11：45。研修の10日間を共に過ごすメンバーが、成田空港に集合した。園芸療法士をはじめ、作業療法士、看護婦、製薬会社の薬草部門研究員、造園関係者、土壌改良メーカー社員、知的障害者施設長、自遊人（定年退職後自由に過ごしている）と、職種も年齢（20～60代）もバラバラのメンバーであった。この職種も年齢もバラバラの11名が「園芸療法」というキーワードで集まり、一緒に過ごすに従って互いの視点から意見を交わす仲間となり、この新たな出逢いから旅は始まった。

### 見学先での園芸療法について

約1日をかけて最初に着いたのは、アメリカのオールバニー。ここから実質7日間で12施設を見学するというハードな研修が始まった。今回の見学施設は、障害別の医療機関から福祉施設、NPO、当事者活動、養成施設など、園芸活動を通じた医療・保健・福祉の全貌が概観できるよう

---

Horticultural therapy study tour in America and Canada

\* 京都大学医療技術短期大学部

Kikue Koshihara, OTR, Hiroshi Yamane, OTR : Division of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Kyoto University

表 1 見学施設と概要

都 市 名	訪 問 施 設	概 要
1 アメリカ オールバニー	ウェイ・トゥ・グロウ	ボディール園芸療法士が行っている園芸療法の NPO 活動の場。
2	パウンドビューファーム	知的障害児の両親が設立したガーデン。障害の 有無に関係なく子どもが遊んだり学べる場。
3	アンリミテッドガーデン	地域活動を基盤とした総合的園芸療法施設。
4	フォーウィンズ	民間の精神病院。
5	メンタルヘルスセンター	精神障害者に対する公的助成金による当事者の NPO 活動の場。
6	プリンモア リハビリテーション病院	140 床の身体疾患を対象としたリハビリテー ション専門病院。アメリカ園芸療法協会会長の カリン氏が勤務。
7 フィラデルフィア	ロングウッドガーデン	425 ヘクタールの敷地に 65 ヶ所庭園がある植 物園。
8	メルマークホーム・メドウズ	ADL の自律と授産を目的とした知的障害者の 民間デイ施設。
9	パークレイフレンズホーム	クエーカー教徒の老人保健施設。
10 カナダ	ホームウッドヘルスセンター	カナダ唯一の民間精神病院。
11 トロント	セントジョゼフ病院	老人ホームと老人病院からなる高齢者のための 施設。
12	カナダ園芸学校	1 クラス 15 名、2 年間、授業料無料の園芸学校。

なコースであった。その各見学先と概要を表 1 にまとめ、その主な内容と感想を簡単に紹介する。

ウェイ・トゥ・グロウでは、ニュージャージー州ルトガー大学で園芸療法を教えているジョエル教授から、高齢者の園芸療法のレクチャーを受けた。園芸療法の話に関しては基本的な内容が中心となったが、その中で高齢者の問題点ばかりが挙げられ（スピードが遅い、役に立たないなど）、効率主義らしいアメリカの高齢者に対するシビアな対応が印象に残るレクチャーであった。

パウンドビューファームでは入り口に可愛いトールペインティングの看板が立てかけられ（図 1）、人がすっぱりとはいってしまうサンフラワーーム（ひまわりの部屋）、手作りのものが沢山詰まった道具置き場など、手作りの暖かさを感じさせる空間になっていた。障害の有無にかかわらず、様々な子ども達が園芸を通して遊びや学習をしており、暮らしに根づいたガーデンである。どの国にも共通する子どもに対する親の愛情を感じるような場であった。

アンリミテッドガーデンは、広大な土地に約 100 名が入れる研修室があり、その横には植物で作られた圧迫感のない垣根で囲まれたガーデンがあった。中には様々な高さで設置されたレイズドベット、触覚・視覚・嗅覚・味覚が刺激されるように考えられた植物が植えられるなど、様々な工夫がされていた。

フォーウィンズは広々とした敷地に、図 2 のような平屋建ての建物がいくつかあり、その建物ごとに障害別、年齢別に分かれて入院生活を送っていた。入院費は 1 日に約 1,000 ドルかかり、入院期間は 7~15 日（子どもの場合は 1 ヶ月ほど）であった。日本のデイケアにあたるデイリトリートメントは利用期間が 3~6 週間であり、入院や通院とも利用期間は民間保険によるマネジドケア制度によって費用の問題で決められていた。教育的プログラムが中心で、分裂病圏の人はついてこ

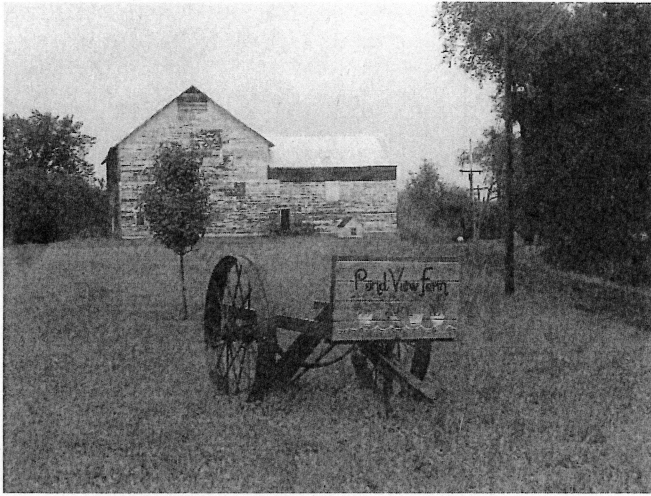


図1 パウンドビューファームの看板



図2 フォーウィンズ入院棟

られないとのことであった。日本の精神病院とスタッフ数、物理的環境も全く違っていて羨ましさを感じたが、マネジドケアによる経済的影響が、治療内容を左右していることを対象者はどう感じているのか心配になった。

メンタルヘルスセンターは、スタッフの約80%が当事者であり、自分達の芸術的作品を展示したり、販売したりして社会参加をしていた。入院したくてもなかなか入院できない状況があると語る当事者にとって、このセンターは気が休まる場であることが伺え、税金をもらう人から払う人へと変化したと話す姿には自信が感じられた。

ブリンモアリハビリテーション病院では、園芸療法施設である大きな温室を中心に、駐車場からもよく見える場所に、作業療法士や理学療法士が設計に協力したセラピューティックガーデン(図3)があった。園芸療法の利用の決定や評価、治療費の請求等は全て作業療法士や理学療法士が行



図3 セラピューティックガーデンで説明するカリン米園芸療法協会長



図4 メルマークホーム作業室

うが、実際の活動は園芸療法士が行っていた。見学当日は実際に6名ほどのグループセッションに参加させてもらい、患者さんと一緒に園芸活動を通して関わることになった。言葉は通じなくても、表情やジェスチャーで十分気持ちは通じると感じ、楽しい時間を過ごすことができた。

メルマークホーム・メドウズでは、知り合った子ども達明るく、快く私達を出迎えてくれた。ここでは授産の役割も担っているため、フラワー製品、陶芸、ステンシル、織物などが行われ、お給料が支払われていた。どの作業も子ども達の能力に合わせて段階付けされ、工夫がされていた(図4)。各々が自分のしている作業に自信を持って取り組み、見本を見せてくれたり、説明をしてくれた。ここではハンドベルも練習されており、訪問した私達のために演奏してくれた。施設のどこの場所でもゆったりとした時間が流れ、皆楽しそうに過ごしていた。

パークレィフレンズホームは、家庭を感じさせるように作ったという施設で個室になっており、



それぞれが好きな時間の過ごし方をしていた。ここではセラピードックが活躍し、施設の所々に緑があり、誰に強制されるということのないゆったりとした時間が過ごされていた。

カナダ初日の見学先であるホームウッドヘルスセンターは、迎賓館やいつくもの建物、林までもが広い敷地内にあり、病院とは思えないような環境であった。病院には301床に対してスタッフ600名と300名のボランティアがおり、病状によって入院期間は決定されていた。ここではカナダ園芸療法協会の元会長のミッチェル氏が、園芸療法のセッションを行ってくれた。それぞれ一人分の材料が器に入れられて用意され、好きなポプリを選んで瓶に入れ、瓶のふたに飾り付けをして完成させるというセッションを受けた。通常は園芸療法士とボランティアでセッションは行い、作業療法士は主に認知機能や日常生活動作に関わっているとのことであった。

セントジョセフ病院では、環境療法的意味合いで園芸療法が行われており、整備された庭は心を和ませるものであった。

以上の10施設（その他に2施設）を見学し、最終日にみんなでナイアガラの滝を間近で見て、体全体にしぶきを浴び、大自然にふれ、今回の旅の幕はおりた。今回のツアーでの大自然とのふれあい、それぞれの現場で頑張っている園芸療法士の人達、同じ場を共有した背景の違う仲間達、経験した全てのものが新しい刺激となり、様々なことを教えてくれた。

### アメリカとカナダの園芸療法の現状

園芸活動は、園芸療法士によって医療・福祉・教育と様々な領域で用いられ、医療の中では、補助的療法として位置づけられていた。園芸療法が直接診療報酬の対象になっていないため、他の認可された療法のプログラムの一部として利用されていた。この点は日本と変わりがなかったが、園芸療法の教育制度は大学や大学院で園芸療法の講義がされており、日本より充実していた。その教育は、主として農林業、造園関係の出身者によってされているためか、植物の育成の仕方やそれぞれの特性を生かした利用の仕方、環境の整備や空間の生かし方などは見習うことも多かった。また療法としてでなく、福祉的園芸や都市の生活環境、職場の作業環境といった広い視点からの園芸の利用に、園芸療法士が関わっていることは新鮮な話であった。

しかしその反面、治療的関わりに必要な医学的知識やリハビリテーションに関する知識、心身の機能との関係における作業の特性の分析などの不足を感じた。そのため、経験に基づいて行われている印象を受け、療法（治療）としての対象者の評価と治療計画が十分にされていないように思われた。特にアメリカでは、マネジドケアの影響のため経済的な面から、短期に効果を上げる治療が求められており、園芸療法のような時間のかかる治療法はその長所を十分に生かさず、大勢に効率的に行えるという利用の仕方がされていたように思われる。

### アメリカと日本の医療現場の違いについて

アメリカは、マネジドケアの導入により、保険が適応されるかされないかで治療内容が決まり、患者さんの評価もそのためにされることが多いとのことであった。マネジドケアは、本当に必要な治療だけを行いアセスメント技術を高めるという点では、プラスの効果があると思われる。しかしその反面、経済的効果を考えるあまりひとが生きるために必要な質的要素を無視してしまう危険性を感じられた。日本では、健康保険制度によって特別なことを除いては平等に医療を受けられ、保険によって治療費は支払われ、治療期間にも余裕がある。そのため、過剰な医療を受けさせられる危険性もある。日本でもマネジドケアの実状を考慮し、参考にしながら、適切な治療が適切な期間で行われるよう考えていかななくてはならないと思う。そのためにも、評価とそれに基づいた適切な

治療計画、効果判定がされることが必要であり、重要であると考えられる。

### ボランティアについて

見学したどの施設においてもボランティアの存在は大きく、医療機関、福祉施設、地域活動と様々な場面で機能的に活躍していた。役割もはっきりとしており、ボランティアなくしては成り立たない活動も多かった。日本では、ボランティアする側とされる側がボランティアの役割を十分に理解していないこともあり、うまく活躍していることが少ないように感じられる。今後はアメリカのように、ボランティアの育成も医療、福祉機関が考えていかななくてはならないと思うし、そうすることが医療や福祉の現場を知ってもらう良い機会になると思われた。そうした働きが地域ケアの第一歩となり、またノーマライゼーションの実践という点でも必要になると思われる。

### 園芸療法と作業療法の連携

作業療法士と園芸療法士が連携していたリハビリテーション病院では、セッション中は作業療法士や理学療法士が同行して対象者の治療目的や症状を示し、実際の活動は園芸療法士が考えて対象者に関わっていた。園芸活動はグループで行われていることが、コスト的、効率によるものであった。園芸療法や作業療法にかかわらず、医療機関の職種においては専門分化がされてきており、その専門ごとの内容には深まりが見られるが、チームの構成部署が多くなった分だけカンファレンス等が機能せずに、全体としての効率は低下し、それぞれの評価が生かされていない印象を受けた。

今後日本でも、さらに様々な分野の専門家が誕生していくと思われ、作業療法士も他職種といかに連携をしていくかということが、より問われるようになるであろう。そうしたときに、分業としてではなく協業としてチームアプローチができなくてはと思っている。

### 当事者活動の支援

メンタルヘルスセンターのように、当事者の活動を支援することが、アメリカでは精神障害者に対して進んで行われている。当事者の活動を支えることは、結果的には医療費の軽減になり、当事者にとっても良い結果をもたらしている。日本でも精神障害者生活支援センターが少しずつ設置されるようになってきているが、専門スタッフが配置され、まだ当事者を支えながら当事者が主体となって活動しているという所までは至っていない。専門スタッフは側面的な援助をし、障害者自身を支援することで自助努力を支える働きかけになるように、日本でも力をいれていかななくてはならない。

### 旅のおわりに

日本に帰り、見慣れた景色を見ておそばを食べながら、「やっぱり日本が良いなあ」と、どこかホッとした自分がいた。今まで慣れ親しんできた五感の刺激（特に味覚）に安心し、なじんできた生活や環境の大切さを改めて実感した。

今回のアメリカ・カナダの生活や園芸療法を見ることで、日本の歴史・文化・環境との違いを感じるが多かった。植物が、環境が合わなかったり育て方が悪いと育たないように、アメリカ・カナダで見てきたことも、日本の文化や環境や生活に合わせながら用いていくことの必要性を感じた。作業療法でも、日本の文化や生活の中にある臨床という畑を大事にしつつ、その畑を生かすために必要なことは何なのかを考えていかななくてはならないと思っている。

最後に、沢山のことを気付かせてくれたアメリカ・カナダの大自然、園芸療法を通して知り合った人達、旅で出逢った仲間達に感謝する。